原爆文学研究会報
第七十三号
原爆文学研究会　二〇二五年三月

居心地の悪さのなかに身を置きたい

相川　美恵子

私はもっぱら児童文学ばかりを読んできましたし、加えて、アカデミズム的な鍛錬の場に持続的に身を置いてきた者でもないので、この研究会に参加するには毎回、覚悟が要ります。少し誇張して言えば、外国語を習いに行く感じです。

実際、発表の中身も討論の中身も、しばしば聞き取れません。発言したあとはたいてい「しまった」と後悔して心の中で自分を罵倒しています。ですから、原爆文学研究会は、なかなかに居心地の悪い場所です。私の的外れな発言を受け止めて返してくださる側の皆さんにとっても、結構面倒臭いかも…ンなことを思わなくもありません。

この会を通していろいろな作家、作品と出会いました。例えば大田洋子の『夕凪の街と人と』は、名前こそは従前からよくよく知りつつ読まずに来てしまった作家作品の一つでした。本作は、どうして日本の児童文学には被爆地の記憶を伝える作品がないのだろうということを考えるきっかけになりました。日本の児童文学は被爆者の物語をたくさん持っています。ですが、これといった被爆地の物語を私は即座に思い浮かべることができませんでした。私が知らないだけかもしれないということは大いにありえるので、その点は断っておきますが。かわりに、戦災孤児の視点から戦後の混沌を見つめた佐野美津男の『浮浪児の栄光』がふと、浮かびました。浮浪児狩りやかっぱらい、警官との鬼ごっこに加えて、「パン助」や主人公にスリの手口を指南した朝鮮人の李、閉鎖される朝鮮学校の構内で日本人の警官に殴られる朝鮮人たち、…「あらっ、朝鮮で戦争が始まったわ」で物語は閉じます。東京大空襲で戦災孤児となった佐野美津男にとって、戦後は新しい社会の到来などではなく、すきっ腹を抱えたおのれの命一コで這い回る戦場でした。

そしてそこには、当然ながら大勢の朝鮮人も居たのです。「アイゴウ」と叫んでいた彼らのその後を、この国の児童文学は書き続けてきただろうか、と考えます。

繰り返しになりますが、『夕凪の街と人と』を私は被爆地の物語として読みました。そして、被爆者の物語と被爆地の物語とは違うということを知りました。それからは、原爆を題材にした作品に限らず、児童文学を手に取る際には、何が語られているのかと同時に、何が語られていないのか、語られていないとしたら、それはなぜなのかという

ことを以前にもまして意識するようになりました。
そんなことを考える機会をこの研究会は私につくってくれます。なので、もう少し、この居心地の悪さの中に身を置きたいと願うものです。

第七十三回　原爆文学研究会報告

二〇二四年十月十九日（土）、二十日（日）に第七十三回研究会を長崎市内で開催しました。

一日目の研究発表は長崎大学を会場として、対面とオンラインのハイブリット形式で行いました。個人発表一本と「原爆文学」再読企画の十一回目として井上光晴『明日―一九四五年八月八日・長崎』を取り上げました。

西河内さんのご発表は、「ひばく星人」が問題化していく過程について豊富な資料とご自身の調査をもとに検証されるものでした。被爆問題が特撮というキャラクタービジネスと出会うことによって引き起こされる問題について鋭く切り込むご発表でした。会場からは、議論の検証可能性を高める必要性や、当時の団体の内部の力学についての質問がなされました。

再読企画は、中野和典さんの司会で川口隆行さんと畑中佳恵さんから発題いただきました。井上光晴の文章をどう読み、受け取るか、質疑の中でも読み手によって受け取った様相に違いがあることが見えてきました。

二日目は対面のみの実施で開催しました。長崎原爆資料館学芸員の奥野正太郎さんよりお話をいただきました。実務家の立場から、原爆資料館の収蔵資料の写真資料の分析や活用について教えていただきました。

資料館見学の後、時間の許す参加者で、まだ暑さの残る十月の長崎市を散策しました。長崎原爆資料館付近から路面電車を利用して城山小学校平和祈念館まで足を伸ばしました。句碑については樫本由貴さんから解説をいただいたり、城山小学校では村上美奈子さんに校庭まで案内していただいたり、参加者の皆さんの研究と繋がるような散策となりました。

◇「原爆文学」再読11
井上光晴『明日―一九四五年八月八日・長崎』

報告①
『明日』はどのように読まれてきたか？

中野　和典

井上光晴『明日―一九四五年八月八日・長崎』（「使者」一九八二・二）を再読するために、この小説がどのように読み継がれてきたかを整理した。もっとも多い解釈は『明日』がいかに長崎原爆の前日（過去）を再現しているか、その再現からいかに一九八二年以降の明日（未来）を展望しているか、というものである。そもそも井上光晴は「あとがき」の中で〈私は可能な限りありのままの八月八日を再現しようと試みた〉、〈一九四五年八月八日の長崎は、一九八二年の今日、一九八R年八月八日の「明日」にそのまま通じる〉と記しており、この自作解説が『明日』を読むときの大きな枠組みとされてきたのである。長崎原爆の前日の再現については、一九七〇年代に長崎で行われた爆心地復元運動と方法が一致していることが指摘されている。一九八二年以降の未来の展望については、井上がこれから核戦争だけでなく、日本でも原発事故が起きるかもしれないことを『明日』が文庫化される際（一九八六）に「あとがき」に追記していたが、二〇一一年に起きた東日本大震災と福島第一原子力発電所事故によって『明日』の読まれ方も変わってしまったことを紹介した。

この他にも「本文と典拠の関係をどのように考えるか―第9章における破調をめぐる議論」という視点から『明日』の9章において、突然、小説の素材であったはずの証言や書簡が、直接的に引用されていることを小説の限界と見るかどうかで評価が分かれていることを紹介した。また「構成をどう読むか―カウントアップの時間感覚とその破壊」という視点から『明日』の時間構成が1～9章までのカウントアップによって連続的（日常的）な時間感覚を描いた上で、突然0章で終わらせることによってその時間感覚の破壊が示されていると解釈されていることを紹介した。最後に「「再現」の死角をどう読むか―外国人の「不在」」という視点から『明日』には長崎にいたはずの外国人たちの姿が捨象されてしまっていることが指摘されているが、この再現の空白を補うように映画『TOMORROW 明日』（一九八八）では、長崎で差別的な取り扱いを受けている朝鮮人や連合軍捕虜たちの姿を描いたエピソードが新たに追加されていることなどを紹介した。

質疑応答のときには『明日』で用いられている方言は忠実なものなのか、方言の使用によってどのような共同体が立ち上げられているのかといった興味深いご質問をいただいた。今後の課題としたい。

報告②
『明日』は、いまもなお〝明日〟たりえているのか？

川口　隆行

井上光晴『明日―一九四五年八月八日・長崎』（以下『明日』と略す）の再読に向けて、以下三点の問題提起を行った。

問題提起①　原爆を直接描かない『明日』が、「原爆文学」として機能する条件として、東西冷戦の核戦争の危機、チェルノブイリ原発事故という一九八〇年代の社会的文脈（この場合「大きな物語」と言い変えてもよい）があったのではないのか。

現在、核の危機が去ったわけではないが、テクノロジーの革新と相まって、総力戦体制のイメージの延長にあった全面戦争の枠組に収まらない地域紛争や内戦など戦争の形態も複雑化している。一九八〇年代と同様に、『明日』を、「原爆文学」として読むことは可能なのか考えたほうがよい。

問題提起②　赤ん坊の誕生という「希望」、描かれないがゆえに際限なく増幅する原爆の「非人道性」というイメージの落差によって駆動する悲劇のドラマツルギーを手放しに評価することは、核の特権化という事態に手を貸すことにはならないのか。

新しい生命の息吹を象徴的に提示しつつ、この「希望」を破壊する原爆の恐ろしさを対置させる作品の戦略は、核のカタストロフィーを忌まわしい未来でありながら、現在の日常を超えた外部へのあこがれとして投影する「核の崇高」概念（フランシス・ファーガソン）と近似性を備えているとも見て取れよう。

問題提起③　「八月九日」を描かない『明日』は、読者が原爆投下に関する既有知識を前提とするが、発表から四〇年以上経過し、広島・長崎への原爆投下から八〇年を迎えようとする今日、そもそもそれは自明なのか。

根本的な問題として、現在の読者は、「一九四五年八月九日の長崎」の何をどのように「知って」いると言えるのか。広島・長崎の被爆体験者は高齢化が進み、社会からの退場は不可避であるばかりか、いよいよ加速度的に進んでいる。体験の継承が盛んに唱えられているが、様々な困難にも直面している。原爆を直接描かない「原爆文学」として、『明日』というテクストが機能する条件は、今日さほど当たり前のことではないのかもしれない。

報告③
井上光晴『明日―一九四五年八月八日・長崎』再読のために

畑中　佳恵

四項目に分けて話した内容を簡潔に整理する。まず一点目として、本作は国内ツーリズムのまなざしを意識し、読者獲得に利用した側面をもつのではないかと指摘した。作

品発表の一九八二年までに大型観光キャンペーンが相次いだことは周知のとおりである。『明日』はそれまでの井上の原爆関連作品と異なり、長崎市内を中心的な舞台とし、異国関連の歴史や文化事項とかかわる語句、名所の地名等が書き込まれている。そこから、八〇年代の読者の関心に働きかけようとする作者の意図を推察した。

二点目として、単行本の意匠を取り上げ、本文とのかかわりを説明した。とくに抽象画を用いた化粧箱のデザインは、原爆被災でレールが断線し、車輪が機能を停止するイメージを喚起する。小説の中で変わらぬ日常の象徴として登場する電車が、リアリズムでは捉えきれないほど変容・破壊されるという「明日の予告」となっているといえる。それと関連して、小説冒頭の数頁には、読者にフラグ（予兆を感知させる要素）を探すよう誘導する表現として、車輪のように丸いものが頻出していることも注目される。読者はその喪失や異形化を予感し、何げない日常の一欠片に不吉な出来事の前兆を読み取ることになるのではないか。

三点目として、登場人物の多様性と、それを描出する手法について考えを述べた。井上光晴は一九五五年に東京に転居してしばらく『週刊新潮』のアンカーをしていた。章ごとに異なる人物を取り上げ、当日までの行動・会話・思考を示す本作の構成や、とくに証言資料を引用する第九章の位置づけについて、アンカー時代の「関係者の話をつなぐ」というパッチワーク的な手法が一貫して用いられている可能性に言及した。

最後に、無垢で無力な被庇護者のイメージからかけ離れた「新生児の表象」に注目した。生まれる前から社会化され、戦時下の共同体の一員となっていることが窺える描写を確認し、本作には、三菱関連の人物の多さや沖縄戦をめぐる冷酷な会話なども含め、「戦時下長崎の日常のなかにある暴力性・戦争責任」について考えさせる手がかりが少なくないことを述べた。研究会では本作に欠けている視点や要素が話題となったが、八〇年代以降の読者に原爆への関心をもたせ、かつ思考停止に陥らせない工夫が張り巡らされた希有な作品といえるのではないか。

◇印象記

奥野正太郎さんのご講演およびフィールドワーク

村上　美奈子

二日目の午前中は、長崎原爆資料館の学習室を会場にして、学芸員である奥野正太郎さんのご講演「長崎原爆資料館所蔵資料の保存と活用の現在地～実務家の立場から」を伺った。その後、お昼にかけて十数名で、原爆資料館向かいの松尾あつゆきらの句碑等を見た後、山王神社の一本足鳥居や被爆クスノキまで歩き、そこからさらに路面電車で二駅分移動して、城山小学校を訪問した。

中野和典さんが「師匠」と呼んで敬意を示している奥野氏の講演では、配布資料にも貴重な写真や地図等が豊富に掲載されていた。研究会の前週にこけら落としが行われた

ばかりの長崎ピーススタジアム付近の原爆投下から一か月後の写真、私が調べている城山小学校の被爆前と後の校舎の写真、原爆で犠牲になった教職員の方々に関わる資料、『原爆文学研究』二十三号に投稿させていただいた内容にある「耐子さん」が被爆翌日に防空壕で発見された後に運ばれた三菱グラウンドの被爆後の写真等、ハッと息を飲む数々の資料とご講演の内容だった。（奥野さんが城山国民学校の教職員のことを調べているのに対して、私は城山国民学校の子どもたちのことを調べているのであるが。）

原爆資料館の学芸員という立場や制約について語っていただき、また、右記のような写真において、山の稜線や焼け残った構造物の位置や見え方から被写地点や時期を特定していく専門性の高さを知った。

講演後に訪れた山王神社の被爆クスノキは、痛々しい大きな傷の治療痕を抱えながら樹齢何百年ともいわれる太い幹でその場所に生き続けている。

続いて訪れた城山小学校では、被爆校舎の一部を保存して改修した「平和祈念館」や敷地内の被爆樹木（双子クスと二〇一六年の大雪が致命的になり枯れてしまったカラスザンショウ）、これも先述の二十三号の内容にある少年平和像、そして、集会室では中野さんが林京子「友よ」のご研究の際に見せていただいたという被爆後三十三年の写真展にあったパネルを出してきて見せていただいたり、校庭のかよこ桜や原爆殉難者の碑等を、それぞれに、あるいは皆で見たりする機会となり、城山小学校を第一のフィールドとする私としては、研究会の皆さまにも足を運んで見ていただいて、感慨深いひとときとなった。

彙報

第七十三回　原爆文学研究会

○日時　二〇二四年十月十九日（土）・二十日（日）

○会場　（一日目）長崎大学教育学部41番教室

（二日目）長崎原爆資料館平和学習室

○研究発表

西河内靖泰「『ひばく星人』問題を検証する―なぜ『問題』になったのか？　本当に『差別事件』だったのか？」

○「原爆文学」再読11

井上光晴「明日――一九四五年八月六日・長崎」

司会：中野和典

発題：川口隆行・畑中佳恵

○講演

長崎原爆資料館学芸員　奥野正太郎

「長崎原爆資料館収蔵資料の保存と活用～実務家の立場から」

○フィールドワーク

長崎原爆資料館見学及び周辺散策（山王神社、城山小学校平和祈念館）

編集後記

巻頭エッセイは相川美恵子さんにお願いいたしました。執筆が年末年始のお忙しい時期の依頼にも関わらずご快諾いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

「原爆文学」について考えよう、研究しようとすると、いつもどこかで、よそ者であると肩身の狭さを感じることがあります。東京からこの研究会に参加する地理的な距離の問題、経過した時間の分の距離。本当に参加していて良いのだろうか。そんなことを思いながら、次の研究会に参加申し込みをするのは、考える機会を与えてもらえるからでしょう。その機会を与えてくださる登壇者の皆様ならびに質問者の皆様に敬意と感謝が絶えません。

第七十三回研究会はフィールドワークの実施も叶いました。当日の参加者で話しながら市内を散策したことがきっと今後も記憶として残っていくのだと思います。

戦後八十年といわれる二〇二五年、今の世話人会による研究会もあと一回となりました。最後になりましたが、研究会にご参加いただいた皆様、会報への執筆をご快諾いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

（堀本　嘉子）

発行元　原爆文学研究会事務局
〒八一四-〇一八〇　福岡市城南区七隈八-一九-一
福岡大学人文学部　中野和典研究室内
tel:092-871-6631　URL http://www.genbunken.net/